http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

Breeze from the field of thatch-grass

2023年2月28日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信68号

麗澤中学校・奥利根水源の森林フィールドワーク対面式

目　次

■ 10月下旬～2月の活動報告(事務局)・・・・・・・・・・・・1
■ 2022定例活動⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
「茅刈り」
◆開催報告(草野　洋)
◇感想文(大山　亮)
■ 2022定例活動⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
「茅出しと山之口終い」
◆開催報告(草野　洋)
□ 青水トピックス２題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
「草原の里百選・認定書授与式」(草野　洋)
「かみのやま草屋根プロジェクト」(米山　正寛)
■ 麗澤中学校奥利根水源の森林フィールドワーク・・・・7
◆実施報告（藤岡　和子）
■ 流域連携活動「小貝川・菅生沼の野焼き」・・・・・・・・・9
◇参加報告(稲　貴夫)
□ 藤原だより(北山　郁人)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
■ 野守のつぶやき(清水　英毅)・・・・・・・・・・・・・・・11
編集後記（敬称略）

2022.9下旬～2023.2の活動報告

【９月】（補遺）

● ２７日　毎日新聞全国版環境面における、「草原の里100選」関連記事の中で青水の活動が大きく紹介される。

【１０月】

● １日、２日　定例プログラム「茅穂採取とミズナラ林整備」実施。11名参加。茅穂15kg採取。（ここからススキの種を取り、山の崩壊地などの緑化のために空中散布されるもので、今回は試験的に10.33kg採取。発注元の「紅大」は本格実施時、50kg以上を引取りの意向。）

● １８日　「草原の里１００選」選定証授与式&フォーラムに、青水より北山塾長以下４名が参加。終了後の代表者による１分間スピーチで、塾長が「飲水思源」をアピール。

● ２５、２６日　麗澤中学校「奥利根水源の森林フィールドワーク」一年生１６５名を塾長以下１４名がインストラクターとして受け入れ。茅刈り、古民家見学、自然観察などを実施。

● 一般参加プログラム「茅刈」を実施。現地３名を含む３３名参加。

● ３１日　『茅風通信』６７号発行。

【１１月】

● １９、２０日　定例プログラム「茅出しと山之口終い」実施。参加者２０名。併せて、記帳台、案内板、防護柵の取り外し、撤去作業を実施。

● １９、２０日　茅出しにあたり、つくば市教育局文化財課の職員が19日８トン１台・４トン２台、20日４トン２台で来訪。茅ボッチ全量を引取り搬送。

【１２月】

● つくば市との間で、引き取った茅の正式契約を締結。日本茅葺き文化協会の斡旋によるもので、同市の国指定史跡「平沢官衙（かんが）遺跡」にある茅葺構築物の修復に活用される。今年度と翌年度の２年間にわたり、供給する予定。

【１月】

● ２１、２２日　流域連携プログラムとして茨城県常総市の小貝川、菅生沼での野焼きに延べ１９名が参加。

● ２４日　イオン環境財団より、森林塾青水が第32回(2023年度)環境活動助成の助成先団体として決定したとの通知を受け取る。

（以上）

■2022定例活動⑥　　「茅刈り」
ボランティアの底力発揮・カモシカも加勢

報告　草野　洋

今年の茅刈は 10 月 29、30 日に実施。参加者 33 名に加えて、現地スタッフや役場関係者等など総勢 38 名が上ノ原で 2 日間の茅刈りを行いました。今年は若人や茅刈り経験者の参加も多く、目標としている 3000 束の刈り取りが達成できることを期待させる顔ぶれが揃いました。

結果を先に報告すると、670 束（134 ボッチ）を刈り上げたほか、31 日まで延泊して刈った「合宿組」5 人による暫定値 400 束（80 ボッチ）を合わせて計 1070 束、これに地元の茅刈衆の出来高を加えると、目標の 3000 束を超えることになりますが、最終的には、茅出しの際の数量検知で確定となります。

今年の茅束はつくば市にある国指定史跡「平沢官衛遺跡（ひらさわかんがいせき）」に嫁入りし、土壁双倉の茅葺屋根の修復に使われます。茅刈りボランティアの底力のおかげで歴史的遺跡の屋根が蘇ります。

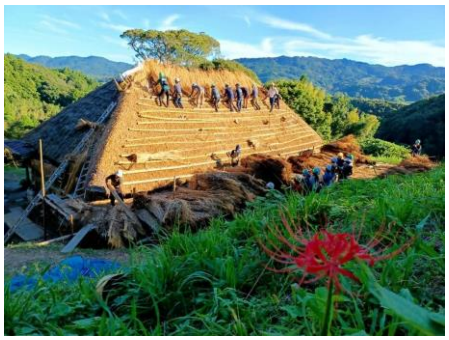
上　今年も素晴らしい紅葉もとで茅刈り
下　始まりの式で草原 100 選認定書披露

秋晴れに恵まれ、周囲の山々の鮮やかな紅葉で疲れも吹っ飛ぶような風景の中の初日、始まりの式で「未来に残したい草原 100 選」認定証を披露したあと、雲越萬枝師匠による茅刈講習が行われました（写真上・萬枝師匠）。去年とはちょっと違った所作の突っ込みに、「毎年やっていても、おいらも研究をしているだよ」との師匠の言葉が身に染みました。師匠の人柄があふれる指導でみんなの腕が上がっていることは確かです。

今年の茅の出来具合は、3 年ぶりに野焼をやった広場の上あたりは良い茅になりましたが、6 年ぐらい焼いていない区画は雑草が多い上に茅の生育も芳しくありません。この差は野焼の効果と思われます。

母親カモシカ　朝日ちゃん？

この日、あるアクシデントがありました。Uさんが刈っていると、突然カモシカの子供が突進してきて「すね」に激突し、Uさんもカモシカも転倒。カモシカはそのまま走り去りました。Mさんが、その一部始終を目撃。プロカメラマンのNさんは、近くで心配そうに見ていたカモシカの母親（？）をすかさずスマホの写真におさめました。幸いにUさんの怪我は「すね」の擦過傷だけで済みましたが、その夜の交流会では話題となって盛り上りました。上ノ原では一組の「つがい」のカモシカがたびたび目撃されていて、われわれはこの夫婦を「武尊君」と「朝日ちゃん」と勝手に呼んでいました。さて今回の遊び好きなイノシシ突進型子供カモシカは、この夫婦



左　車座講座で熱弁をふるう藤岡さん
下　上ノ原の茅の嫁入り先古民家「ゆうぎつか」

の子供だと思いますので、名前を「谷川号」と呼びたいと思います。

この夜の車座講座は藤岡和子さん。千葉県鴨川市釜沼「小さな地球」の「古民家ゆうぎつか」で9月に実施された茅葺屋根復活プロジェクトの体験記です。この古民家は2021年の茅の嫁入り先ですが、たくさんの写真を使って、どのような茅を生産したらいいのか、茅葺き作業を通して実際に体験、理解したことを中心に熱弁をふるっていただきました。彼女から、茅葺の施工職人が上ノ原の茅を「べっぴんさん」とほめてくれたと伺い、大変うれしくなりました。（詳細は『茅風通信』№67参照）

2日目は、初日に予想より多く茅刈りが捗ったので、10時まで茅刈りして、その後希望者は「ゆるぶの森」を散策しました。また、参加者のうち4人が茅刈検定に挑戦しました。4人とも「茅刈り士心得」に合格しましたが、もう少しで茅刈士補に合格する腕前でした。次回は「茅刈士補」合格は間違いなく、4人とも若いので、将来初の「茅刈士」が誕生するかもしれません（写真上・只今検定中）。

刈り取った茅は、ボッチのままで3週間ほど乾燥させ、11月10、20日の「茅出し」で平沢官衛遺跡に嫁入りさせます。

また、今年も2日間の刈り数に応じて「ボッチ券」が配布され、出張販売店の周りは地元産野菜などを購入する参加者で賑わいました。

■参加者感想
「茅刈りからみた世界」　大山　亮

今回初めて茅刈りに参加させていただきました、東京工業大学塚本研究室修士一年の大山と申します。茅刈りを行うにあたって、最も難しいことのひとつはススキと雑草を分ける作業でした。手慣れた方々の動きを観察していると、雑草のみを踏みつけたり、雑草のみを先に刈り取ったり、あるいは雑草のみを刈り取らずに残したりと、きれいにススキだけを分離して刈り取っていくのが見て取れます。一定のリズムで刈り取りと選別が行われていく様は、まさに洗練されたふるまいの美しさとでもいえましょうか、思わず見とれてしまいました。

しかし、外から見てとれる動きのシンプルさとは裏腹に、いざ自分がやってみるとまるでうまくいきません。どんな風にススキの中に雑草が入り込んでいるのか目で見てもすぐには把握できず、手探りでかき分けてもススキと絡まって根元から分離させることができません。刈る、避ける、分ける、といった動作自体の習得以前に、見る目、感じる手、といった認識している世界の違いを実感しました。

そこでまずは、どんな種類の雑草がどんな風に生えているのかを観察しました。大きく分けて3種類ぐらいの雑草が見られ、それぞれ触った感触や強さ、ススキとの絡まり方に特徴がありました。何度も刈る動作を反復する内に、この雑草たちは先に刈った方がよさそうだとか、雑草の縁に沿ってススキを刈っていくのが良さそうだとか、そういう「やり方」が少しずつ分かってきたような気がします。

茅刈りをしていると、茅と自分だけの世界に没入してしまうような感覚になります。普段里山で道具を使って作業をしているとき、苫を編んでいるとき、ヨットに乗っているとき（学部時代ヨット部でした）、そういう身体ごと何かに没頭して頭が真っ白になる時間が僕は大好きです。中でも茅刈りは、背の高いススキにかこまれているということもあって入り込み感が格別でした。そして、手元に集中する作業が多く近くばかりを見ている分、ふと顔を上げたときに目に飛び込んでくる赤く染まった森林は、これまた凄まじい魅力に溢れていました。

単純な作業は、都市の中で暮らしていると誰かがやらなければ成り立たない労働のように捉えられがちです。

単価がいくらだとか、機械でできないだろうかとか、そんなことばかりに目がいってしまいます。でも、自然を相手にした作業は同時に、心地よさとか気持ちよさをはらんでいます。それが今回の茅刈りでも身にしみて実感できました。たくさんの感覚が手や鎌を介して引き出されました。週末のレジャーとして様々な人が茅刈りを楽しみ、それが地域の茅葺屋根に使われ、茅を介したつながりがより広がっていくような未来を共有していきたいです。

■２０２２定例活動⑦　「茅出しと山之口終い」
嫁入り先はつくば市の国指定史跡

報告　草野　洋

上ノ原の茅場では、10 月 29、30 日の茅刈りイベント、続いての茅刈合宿、そして地元の茅刈衆により刈り取られた 649 ボッチ（3,245 束）の茅が、約 3 週間のダイエットでより別嬪さんになり、嫁ぐ日を待っていた。その「茅出し」が 11 月 19、20 日、22 名が参加者して行われた。

今年の茅出しはいつもと段取りが違う。一つは嫁入りのための輿車(トラック)がその日に来るので、別れを惜しむ間もないあわただしさが予想された。それと山の口終いのあと、十二様の前ではじめて「直会」を行うことにしている。

2 日目の天気予報が思わしくなく、嫁入り日の段取りを考えると前の夜はよく眠れなかった。娘を嫁にやる父親のようにナーバスになってしまう。

それでも初日は晴れ間もあり、晴れの日にふさわし。今年の茅ボッチ達は、茨城県つくば市の国指定史跡**平沢官衛遺跡（ひらさわかんがいせき）**の土倉の屋根葺き替えに使われることになっており、現地調査と積み込み確認のため、つくば市教育局の石橋さんが上ノ原を来訪された。

始まりの式では、石橋さんが嫁ぎ先のお家柄を披露(**写真・左**)した後、作業の段取りを説明した。また、今回の茅出しには、1 年前の和歌山**「むすびや弥右衛門茅葺プロジェクト」（『茅風通信』№65 参照）**で出会い、今は筑波大学の大学院で学んでいる S.T さんも初めて参加しており、早速、石橋さんに紹介するなど交流につとめた。そして、雲越萬枝さんよりボッチの縛り方を指導いただいた(**写真・下**)後、早速、茅出しにとりかかった。

茅出し開始から30分もするとトラック3台が到着。積み込み手伝いとボッチのカウント係を割り振り、すでに茅出しが終わっている集落内のボっチを先に積み込み、その間に大忙しで茅出しを継続。林道端にある程度貯まったのを見て次のトラックに積み込む。コンテナ車への積み込みは慣れていないせいか思ったほどの数量が積み込めない。150 ボッチと見積もったが 100 ボッチで満杯。2 台目、3 台目には 130 ボッチ積み込み、この日の搬送量は 360 ボッチであった。2 日目は 2 台なので、残りボッチ数から嫁げない娘が出るかもしれない。

別嬪さんボッチと積み込み作業

この日は奮闘の甲斐があり、3 時半には 3 台のトラックを見送ることが出来たので、明日の山之口終いの準備を行うことにした。まず、十二

様の神前を刈り払い、茅柱を作って四方に立てた。四方柱はいつもは小径木を使うが、今年は茅を束ねて作ったところ、いい雰囲気になった。

この日の宿は関ヶ原、夕食後、稲幹事より「直会」についての解説を聞いた後、早めの就寝となった。

2 日目、朝のうちはもつが、昼頃には間違いなく雨になりそうな曇天である。

積み込み風景と積み込みの完

9 時前にトラックが到着。参加者を積み込み組と記帳台、シカ柵の撤収組に分けて作業を開始した。昨日の経験から積み込みも手際よく、2 台にそれぞれ、130 ボッチと 159 ボッチを積み込み、全員が無事に嫁ぐことが出来た。目出度し目出度し。

2 台のトラックを見送り、もうひと仕事、山之口終いと直会の準備に取り掛る。直会はバーベキュー。雨の中のBBQはちょっとみじめなので食材をお願いしたホテルサンバードのBBQ会場を借りることにした。

上　シカ柵の撤収　下　記帳台の撤収

山之口終いでは、北山塾長より嫁入り先や茅場保全作業の様子を織り込んだ祝詞が厳かに奏上され、柏手を打ち一年の作業の無事と収穫への感謝を捧げた。

上　海・山・里の幸をお供え
下　山之口終い　北山塾長による祝詞奏上

続いて会場を移して BBQ。皆で手分けして準備し、肉・野菜・きのこなどを焼く。羽釜で炊いた新米ご飯、お供えの果物もお裾分けされ、神前での直会が出来なかったものの神様に感謝しながら味わい、一年の締めくくりにふさわしい茅出しとなった。

上　1 年間を締め括れたことに感謝
左　BBQ での語らい

今年の茅刈実績数

●地元茅刈衆
2,185 束（437 ボッチ）

●イベント・ボランティア
670 束（134 ボッチ）

●茅刈合宿（5 人）
390 束（78 ボッチ）

◎合計　3,245 束（649 ボッチ）

■青水トピックス　2 題

○未来に残したい草原の里 100 選に入会の森「上ノ原茅場」が選定
－認定書授与式－　　報告　草野　洋

令和 4 年 10 月 18 日、東京農業大学横井講堂において未来に残したい草原の里 100 選の認定書授与式が行われ、当塾から北山塾長、草野事務局長、藤岡幹事、柳沼幹事が出席しました。これは「全国草原の里市町村連絡協議会」が、団体等が管理する全国の草原を対象に選定したもので、2021 年度第 1 期 34 地域の一つに、「上ノ原茅場」も選ばれました。

当日は認定書授与後 1 分間の認定に当たってのスピーチがあり、北山塾長が青水作製の「飲水思源」の手拭をひろげて見せながら、ひときわユニークなスピーチをしました。

当日は、記念講演、記念フォーラムの他に、6 つの認定団体（草原）の事例発表もあり、各地の活動状況を聞くことが出来てとても有意義でした。**選定記念フォーラム・授与式は、以下のサイトで視聴できます。**

未来に残したい草原の里 100 選　sogen-net. jp

○山形県で出合った茅場との新しい縁「かみのやま草屋根プロジェクト」
報告　米山　正寛

この夏に山形県へ転居し、縁あって 11 月 6 日に上山（かみのやま）市楢下（ならげ）地区で開かれた茅刈りイベントに参加することができました。上山市で茅刈りが復活した経緯と、イベントの様子を報告します。

ここは江戸時代に羽州街道楢下宿として栄えた宿場町です。現在は国の史跡に指定され、集落には昔の面影を伝える茅葺き屋根の建物が 4 軒残されています。

10 年ほど前、市内にある国の重要文化財「旧尾形家住宅」の修理が行われた際、茅葺き屋根のための茅を市外から購入し、多額の費用がかかったそうです。上山市内には、このほかにも4軒の武家屋敷（いずれも茅葺き）があります。そこで市内の茅葺き文化を保存し、地域おこしにもつなげようという方向性が、行政主導で打ち出されました。

実現に向けて、この業務を中心的に担う地域おこし協力隊員を 2016 年から市役所が雇用し、活動の舞台に選ばれたのが、茅葺き屋根が身近にあって地域住民のまとまりが強い楢下でした。こうして、市内で収穫した茅で茅葺き屋根を保全する「かみのやま草屋根プロジェクト」が始まりました。4 年目の 2019 年からは住民組織である羽州街道「楢下宿」研究会が主導する形になり、現在まで続けられています。

茅場として利用されているのは、耕作放棄田に盛り土をするなどした再生茅場（赤山と平林と呼ばれる 2 カ所、計約 2000 ㎡）です。以前の茅場は山の中に散在していたようですが、どこも利用されておらず、プロジェクトの開始に当たっては、茅の搬出に便利な道路沿いで、集落から車で数分程度と近い場所が選ばれました。

良質な茅（ここではススキ）を確保するため、再生茅場では年2回（6 月と 9 月）の下草刈りをします。11 月の茅刈りには楢下地区の住民に加え、市内外で働く茅葺き職人、武家屋敷の関係者、東北芸術工科大学や山形大学の学生・教員、さらに放課後こども教室の児童など、趣旨に賛同する大勢の方々が参加しています。

今年の茅刈り当日は、朝 8 時半に楢下地区の大黒屋（茅葺きの市指定文化財）前で開会式があり、その後 2 カ所に分かれて茅刈りをしました。茅は大人が 2～3 人 1 組になって刈りました。トラロープを巻いて茅を直径 50cm 程度にまとめる人と、その根元近くをエンジン式の草刈り機で刈る人とが連携して進めます。そして刈り倒された茅を大学生などが作業台に載せて、上下 2 カ所を結束バンドで丸いでいきました。ここでは束ねることを「丸ぐ」というのです。小学生には、バンドを適当な長さに切って用意する役割などが与えられていました。最後には冬越し用の杭の周りに茅束を立てかけ（一部は集落の古民家の壁）、正午過ぎに作業を終えました。

当初は少人数で手刈りしていたようですが、茅刈りを続ける中で試行錯誤を重ね、7 年目を迎えた今も手法の改良が続いています。昔ながらの手法とは異なり、草刈り機や結束バンドを使うなどかなり現代的な茅刈りという印象ですが、作業は効率的に進められていました。茅の収量が増えて品質も向上してきたため、4 年目からは市外への出荷もしているそうです。

終了後の昼食は、地区の女性たちが集う楢下ばあちゃんずくらぶのみなさんが用意してくれました。約 70 人の参加者は集落にある山田屋（これも市指定文化財）へ戻り、芋煮汁とお餅（あんこ、クルミ、納豆）、リンゴという地元の食材を使った昼食をおいしくいただきました。

文化財の保存と地域おこしを主眼に始まった取り組みのためか、この茅場を今では希少となった草原と捉えたり、そこに暮らす生物にふれたりする言葉を、参加者からは聞くことはありませんでした。でもプロジェクトが続けられていく中で、そうした生物多様性と関わる価値も見出されるようになるのかもしれません。山形県へ来て出合った新しい茅場との縁を、大切にしていきたいと思っています。

大黒屋　楢下に残る茅葺き屋根建築のひとつ

■麗澤中学校奥利根水源の森林フィールドワーク
～上ノ原茅場入会の森～　報告　藤岡 和子

10 月 26 日清々しい秋晴れの空に紅葉輝く日、麗澤中学校１年生の『自分（ゆめ）プロジェクト』奥利根水源の森林フィールドワークに、森林塾青水メンバー数人がインストラクターとして携わりました。

自分（ゆめ）プロジェクトとは、麗澤中学・高等学校６年間を通じて麗澤教育が大切にしている『感謝の心』『思いやりの心』『自立の心』を育てるプロジェクトです。キーワードは自分そして夢。将来に向かって生きる中で困難にぶつかったとき、しっかりとした目標・夢・志が再びチャレンジする自分の支えとなります。プロジェクトでは、様々な体験や実践を通じて、自分のことを真剣に考え、関心・適性・能力を探り、自己理解を深めていきます。その第一歩が、奥利根水源の森林フィールドワークです。５月に行われた学校内での五感樹木観察会も、秋に行う水源の森でのフィールドワークに向けた意識付けのため実施しています。

ところが、成長過程にある子どもたちにとって大切な『自分（ゆめ）プロジェクト』の体験分野フィールドワークが、新型コロナウイルス感染防止対策のため、２年間の中止を余儀なくされました。開催に向けた感染対策を練り、今年ようやく満を持して再開です。

今年の１年生は、小学５年生（１０歳）からコロナ社会で生活しています。この２年間で環境は大きく変わりました。オンライン授業やリモートワーク、黙食や個人食などの社会情勢がもたらすリアリティの喪失。それは、子どもたちを取り巻く教育・遊び・生活に至る日常全てに影響を与えてきました。

そんな状況の中、コロナ前とまったく同じプログラムを行うことは、自分（ゆめ）プロジェクトが目指す教育に添えないと思いました。「五感で感じましょう」「自由に表現しましょう」という自己理解を深める投げかけに、今の環境がストップをかけてしまうと考えたからです。

そういった現状と、５月に行った五感樹木観察会での子どもたちの様子を踏まえ、秋のフィールドワークのテーマを『リアリティ～直に触れ感じる～』としました。リアリティを深く体感するには、『癒し』がポイントになると考え、癒し教育の第一人者で徳島大学などで教鞭をとるＴＯＥＣ代表伊勢達郎氏が書かれた本を参考に、解放と自由意志（楽しい遊び）を重点にしたプログラムを構成しました。

*****　癒しとは、気づきであり、自分がありのままで生きるためのきっかけである。**
直感的に脳がシフトする中にある、自然を含めた全体性の中に生きることの気づきである。***

＝本より引用＝

癒しプログラムは、遊びと学びを分けない、心身全体に働きかける遊学であることが前提です。そのためには、全プログラムを、ひとつの流れに組み立てることが鍵となります。そこで、コロナ前から行っていたプログラム、茅葺き屋根古民家見学・茅刈り体験・自然観察の３つに絞り、各々にタイトルを付け、全てが繋がりひとつの流れと感じるようにしました。また、ひとつひとつのプログラムの時間を長くし、ゆったりとした時間の中で全身で体験できる時間を取りました。

・自然と暮らし～雲越家古民家住宅見学～60 分
・自然と仕事～茅刈り体験～80 分
・自然を感じる～観察・遊び・ヒーリング～130 分

ここで、今回のフィールドワークの特徴となった『自然を感じる』プログラムを紹介します。

〈導入＝人＝〉
・自分を感じる（呼吸を感じる）
・相手を感じる（背中合わせになり相手の呼吸を感じる）
・相手との関わりを感じる（押す・もたれる）
・シェアリング

〈ゆるぶの森・草原散策〉
・自分の暮らす街と上ノ原の比較
・自分の暮らしと自然に寄り添う暮らしの比較（薪炭林・茅場利用）
・暮らしの水はどこからくる？水源の泉
・シェアリング

〈自然と自分〉
※導入で行った人とのワークを自然物を相手に行う
・好きな自然物を選ぶ
・五感を働かせて相手（自然物）の呼吸を感じる
・自然物と押す・もたれる
・シェアリング（相手が人の場合、自然物の場合の比較など）

〈視覚を封じた目隠しトレイル〉
樹木間を一本のロープでつなぎ、手探りでロープの端までたどる

インストラクターは、導入をプログラムの始めに行うことを必須とし、他のワークをどのタイミングに組み込むかは、それぞれのインストラクターに委ねました。インストラクターも、子どもたちとのリアリティな関わりの中で、伝えたいことや、気づいて欲しいことが湧き上がってくるよう、時間の余白を作り、マニュアルではない構成に努めました。そういった一瞬一瞬の集合が互いに関わることで、生きた体験となりました。

フィールドワーク当日のそういった体験の数々、子どもたちの様子について、ここで多くは語りません。子どもたちひとりひとりが感じることで、その時がありのままの自分の学びであり、気づきであり、

癒しになっていたからです。是非、この記事をお読み下さっているみなさまも、掲載している写真から想像を膨らませ、子どもたちが体感した秋の上ノ原へ行ってみて下さい。上ノ原の風を今、感じませんか。

それでも出し惜しんでいると思われるかもしれないので、ほんの少しだけお伝えします。散策途中ある地点に着きました。

「はい。ここで荷物を降ろして遊びましょう」

そう子どもたちに呼びかけた時の解放された表情や声は、それはそれは希望に満ちたものでした。

「友だちは押したら直ぐ返してくれるから楽だったけど、樹は自分が頑張ってやらないと（意識を向けないと）返してくれない」

そう感想を伝えてくれた子。学校ではおとなしい子が、蔓をのぼり自分の背丈まで上がった姿に驚ている子。

友情を確かめ合ったり、知らなかった友だちの姿に気づけたり、水源の水が美味しかったり、風が吹き木々は揺れ木の葉が舞ったり、ネズミの巣穴前にドングリが同じ向きで並んでいたり。そういった小さな気づきや小さな関わりが、自分（ゆめ）プロジェクトの第一歩ではないでしょうか。

マイナスなことばかり浮かんでくるコロナ社会ですが、このフィールドワークにとっては、より深く里山文化上ノ原を体験するプログラムに練り直し、実践する良い機会となったと感じています。また来年、どんな子どもたちに出会えるのか今から楽しみです。

当日の子供たちの生き生きした様子の一部を見てください。

茅刈り指導の様子

岩の上で瞑想する女の子

水源の一つ柞の泉で

お互いの背中で押し合って立ち上がる

草原の向こうに谷川を望み歓声

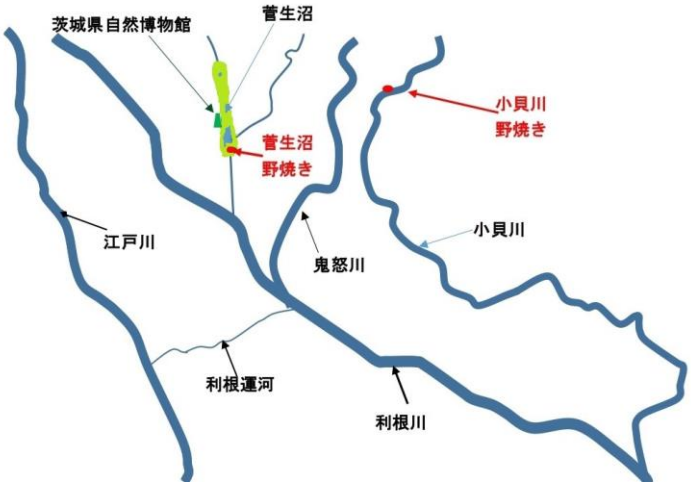
ブドウつるにぶら下がる

木登り

目隠しトレイル

なんでも遊びにしてしまう

■流域連携活動
小貝川・菅生沼の野焼き
報告　稲　貴夫



大寒を過ぎた1月21日、22日、それぞれ茨城県常総市の小貝川河畔及び菅生沼で実施された野焼きに、今年も青水の会員会友が参加しました。

小貝川は、八溝山地を水源に関東平野を南流する、鬼怒川に次ぐ利根川第二の支流ですが、野焼きを行ったのは、右岸にあるオギ原や柳の林床など三ケ所。菅生沼はその西方、鬼怒川を超えて坂東市との境に東西約0．4km、南北約5kmにわたって広がる、茨城県自然環境保全地域に指定された湿地帯で、こちらは南部の沼縁に広がるオギ原を野焼きしました。

ここでの野焼きは、同じ野焼きでも上ノ原とは趣旨が異なります。

両所とも関東平野の中央やや東寄りにありますが、周辺は江戸時代の利根川東遷などの河川改修事業により拓かれた穀倉地帯であり、また同時に、洪水による河川の氾濫も繰り返されてきた地域です。

こうした土地柄もあり、河畔や湿地帯のオギ、アシなどの草類は毎年、田畑の肥料や牛馬の飼料として採取され、また、洪水による攪乱によっても樹木の侵入が抑制されてきました。そして、こうした人と自然の働きによって、タチスミレやヒメアマナなどの植物の生育環境が保たれていました。

しかし、河畔の草類が資源として利用されず、治水事業の進展で河川の流量も安定化したことで、これの植物の生育環境が維持されなくなり、今では絶滅が危惧される希少植物となってしまいました。

そこで、茅場を維持するための野焼きによって、草原性の様々な植物も維持されることに着想を得て、小貝川と菅生沼では、地元の自然保護団体や茨城県自然博物館などが中心となって、希少植物の保全のための野焼きが、小貝川では 20 年、菅生沼では 20 年ほど前から試みられてきました。

小貝川の野焼きは、今年は青水より 10 名が参加しました。野焼きをしたのは、常総線水海道駅から歩いて 15 分ほどの常総市新井木町および水海道渕頭町の小貝川河川敷（右岸）で、ヒメアマナ、タチスミレ、ハナムグラなどの絶滅危惧植物の生育する区域三ヵ所です。

集合、開会の午前 9 時の時点では時折強風が吹いていたため、実施の是非が未確定でしたが、総勢約 80 名による防火帯整備が終了するころには風も収まり、主催者間で協議の結果、実施を判断、絶好の野焼き日和のもとで、三ヵ所の野焼きが予定通り終了しました。ここではヒメアマナの観察会が、茨城県自然博物館などが主催して、3 月 26 日（日）に開催される予定です。

菅生沼の野焼きには、青水より 9 名が参加。集合場所の筑波エクスプレス守谷駅より車二台に分乗し、集合場所の菅生沼「ふれあい広場」へ移動。この日も絶好の野焼き日和のもと、まず 200 名近い参加者が、約 100 メートル四方の区域を田の字型に四区画に分け、刈り払い機やレーキ、熊手で防火帯を整備した後に、野焼きに移りました。

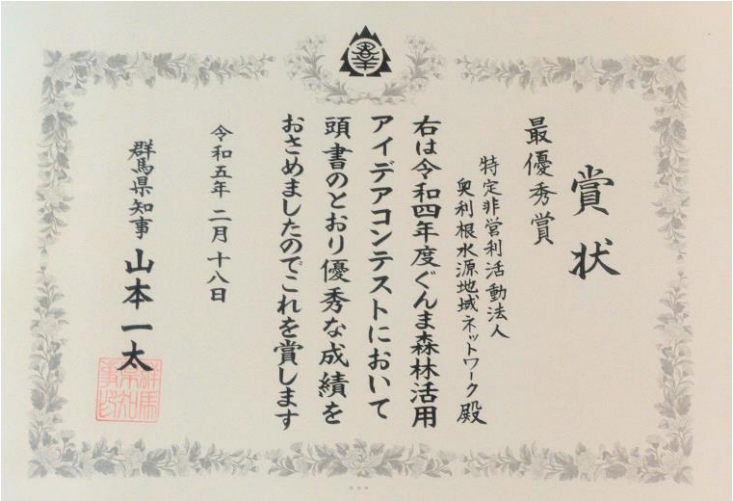
当初は反時計回りに焼いていく予定でしたが、最初の区画の火が仮設防火帯を超えて逆方向に移ったため、順番を時計回りに変更して実施、二年振りに実

施された昨年に引き続き、炎が大きくあがりました。一部燃え残った場所がありましたが、セイタカアワダチソウが侵入している区域とのことでした。尚、菅生沼では 5 月 20 日頃、博物館主催のタチスミレの観察会が予定されていますが、詳しくは博物館のホームページを御覧下さい。

毎年、入念な準備のもとに野焼きを計画、実施されている関係者の皆様に感謝を申し上げます。

藤原だより－現地事務所報告－
奥利根水源地域ネットワークが森林活用コンテストで最優秀賞！

北山　郁人


賞状

最優秀賞

特定非営利活動法人
奥利根水源地域ネットワーク殿

右は令和四年度ぐんま森林活用アイデアコンテストにおいて頭書のとおり優秀な成績をおさめましたのでこれを賞します

令和五年二月十八日

群馬県知事　山本一太

2 月 18 日に高崎市の G メッセ群馬で開催された「ぐんま森林活用アイデアコンテスト」で、奥利根水源地域ネットワークが、最優秀賞を受賞しました！

昨年は森林塾で応募して優秀賞をいただきましたが、今年は NPO 法人奥利根水源地域ネットワークで応募して、最終プレゼンの結果、最優秀賞をいただくことができました。全体の応募数は 20 組、うち 6 組が最終プレゼンに進み、公開プレゼンで一般の方の投票と審査員の評価で選ばれました。応募内容は以下の通りです。

◇コモンズ・フォレスト ～里山レンタル～

概要

利根川源流域のみなかみ町の里山で、自力では管理できない山林所有者から森を借り受け、１ヘクタールごとに区画を作り、流域の人々にレンタルし協働で管理していく取り組みです。モ ニタリングをしながら、適切に森林を管理し、生物の多様性のある豊かな里山を再生させます。 利用料の一部を山林所有者に還元することにより、新たな里山の価値を生み出し、地域への愛 着や誇りを取り戻すことを目指します。

「世界から注目される日本の里山 SATOYAMA」

2022 年 12 月にカナダで開催された COP15 において世界目標として決まった「３０ｂｙ３０」（2030 年までに世界全体で陸地と海のそれぞれ 30%以上を保全地域にする）を達成するため、OECM という保護地域以外で生物多様性保全に資する地域（OECM：Other Effective area-based Conservation Measures）を日本も増やしていかなければなりません。環境省では、2023 年から 100 地域以上の OECM 認定を目指す計画です。日本の豊かな里山は世界から注目されており、この事業で OECM としての認定をめざします。

対象（ターゲット）

環境保全に積極的な利根川流域の都市住民、企業、学校団体等 薪ストーブユーザー、普通のキャンプに飽きたアウトドア愛好家、DIY 愛好会など。

事業内容（実現性）

フィールド： みなかみ町の自力では管理できなくなってしまった森林所有者と提携し、お おむね１ヘクタールあたりの区画を設定し、1 年単位で利用希望者にレンタルする。人工林、広葉樹林、伐採跡地、など多様な森を対象とします。

レンタル料：年間契約で複数年の更新利用も可能。複数区画をまとめて利用も可能。

料金 120,000 円／年／ 1 区画（1ha）

利用条件：里山の生物多様性が豊かになる管理方法であれば、基本的に自由に使うことができます。 専門スタッフと一緒に毎年間伐する対象木の選木等をおこない森の状況をモニタリングしながら整備をおこないます。間伐対象の木であれば、自由に伐採利用できます。キノコ、山菜などの林産物については、生物の多様性を損なわない範囲で自由にとることができます。 資機材のレンタルや伐採等の個別指導、薪づくりや製材などの委託も可能です。季節ごとに森林観察や伐採体験、薪づくりやキノコ栽培、炭焼きなどの講習会等を実施します。

事業を行うにあたっての課題：生物多様性の定義を明確にして利用者と共通認識を作っておく必要があります。土地所有者に事業の目的をよく理解してもらい、長期間わたって管理できる仕組みを作っていきます。

■野守のつぶやき（24号）：令和４年の振り返り
～新たな活動展開と質的転換の兆し！

1.「未来に残したい全国草原の里100選」に！

去る6月、第１次選考34か所に入ったとの報に接した。およそ20年の長きにわたる協働の成果であり、まこと慶賀の至り。11月、一年の締め括り「山の口終い」に際し十二神様に謹んでご報告。併せて、当塾創設来お世話になってきた先輩諸兄に改めてお礼言上。多くは、既に物故・引退された。「飲水思源」＝上ノ原「入会の森」という井戸を掘って下さった諸先達への感謝の気持ち。ゆめゆめ、忘れてはなるまい。

2. 画期的かつやりがいある新たな活動展開

1）流域コモンズの飛び火～流域外へのはみ出し！

●昨秋、房総鴨川の古民家再生のお手伝いをすることになった。今春には福島県の老舗旅館の改修用の茅を供給。この10月は茨木県大子の個人住宅の屋根材を、11月にはつくば市教育委員会へ国指定重文「平沢官衙（かんが）遺跡」の屋根材を供給した。（写真：つくば市行きトラックへの積込み）

●日本一の流域面積を誇る利根川だが、上記行き先はいずれも流域圏外。最早、流域からはみ出し、あちこちに飛び火し始めたというべきか。「利根川流域コモンズ」の看板付け替え検討が必要な時期かも・・・。

2）茅の生産工場から生産工場兼販売事業体へ？！

上記供給活動は、従来の町田工業さん（重要文化財修復専門業）経由ではなく、全て直接納入してきた。つまり、当塾は生産活動に加え販売活動も担うようになったという次第。いわば、業態転換！それに応じた役割分担／体制の見直し拡充が必要に？（写真：大子への直行便）

3）未利用資源の活用に弾み！

●我々のフイールド＝上ノ原「入会の森」の未利用資源とは？イタヤカエデからメープルシロップ、クロモジからアロマオイルを、など既に実験・報告済み。更に、昨年からはフイールドを全面活用したリトリート・プログラムも導入・定着しつつある。加えて今年は、白樺の樹皮の活用についても試験実施された。

●極め付きは今秋，茅穂の採取と航空緑化事業（山腹崩壊地や山火事跡などをヘリコプターを使い緑化する）への供給を試みに始めたこと。（詳しくは、前号6頁参照） これまで何の役にも立たなかった茅穂が関東周辺の郷土種として崩壊地などの復旧に貢献できるかも。何と素晴らしいことではないか。クリアすべき検討課題は少なからずあろうが、前向きに取り組んでほしいもの。

3. トピックス

(1)茅刈検定、若手４名がチャレンジ

●コロナ禍でしばらくお休みしていた茅刈検定。10月末、茅刈イベントに合わせ久方ぶりの開催に若手会友4名がチャレンジ。

●残念ながら、いずれもあと一歩のところで「茅刈士補」！要改善点は明確にて、次回合格はほぼ確実。未来の星たちにエールを送りたい。

（写真：右は試験官、左が受験生です！）

(2)元気なカモシカたちとの衝撃的出会い

茅刈り最中の上原さんにカモシカ2頭が相次いで激突。 いずれも草原の上方から猛スピードで駆け下ってきた。野生動物の識者に聞くと、この時期は発情期の由。先に来たのが雌で追いかけてきたのが牡ではないか、とのご託宣。

“上原さんが上の原で、元気なカモシカたちの恋のとばっちりを食らった”
でも、ご無事で何より！

八十は老いの序の口冬若葉　　島田正吾

皆さま、よいお年を。　令和4年極月 （青）

～編集後記～

青水では上ノ原での活動の他に、首都圏部会が中心となって流域連携活動を行っています。
利根川の流域は一都五県にまたがり、青水のような小団体が全体を網羅するのは無理ですが、毎年一月に実施される小貝川、菅生沼の野焼きは、流域連携活動の柱として定着してきました。
小貝川は長さが鬼怒川に次ぐ利根川第二の支流。八溝山から南へ下り利根川へ合流しますが、日本酒党は、川沿いに必ずある酒蔵に心引かれるでしょう。以前、青水で利根運河や取手方面を探索したとき、酒蔵があると必ずお邪魔していました。
流域連携は、様々な発見に繋がります。コロナの制約も緩まり、新しい発見に期待したいです。（稲）